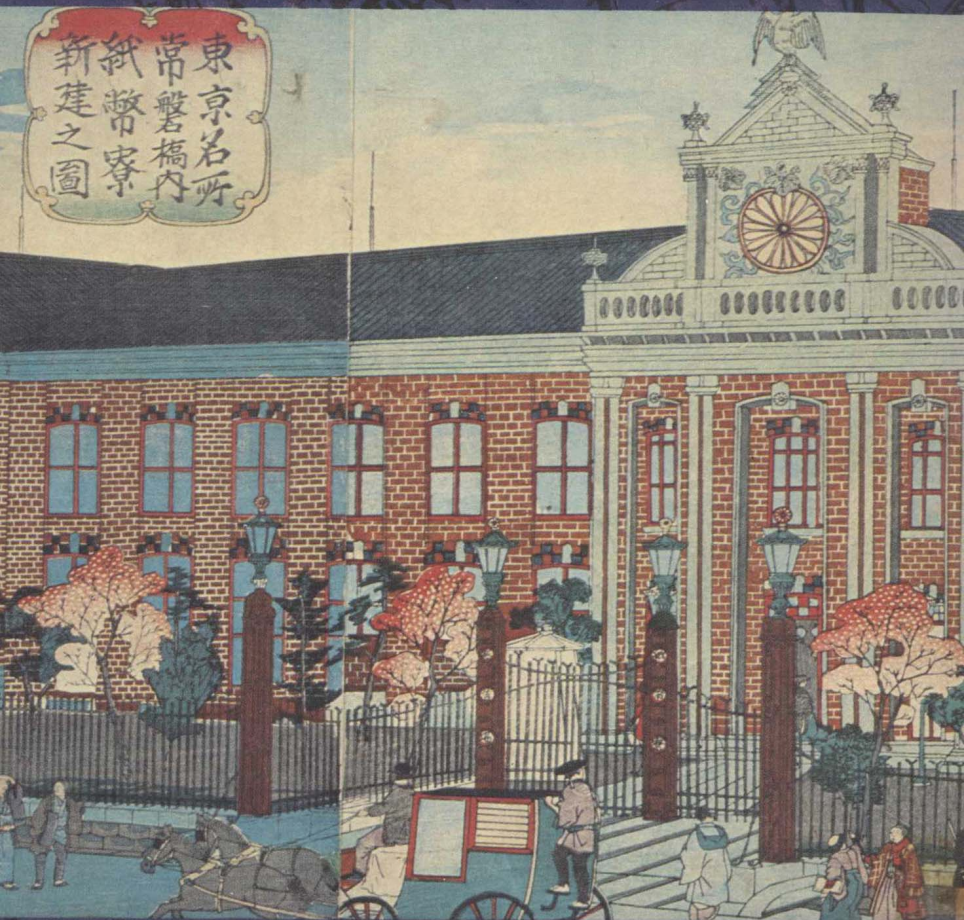


紙幣寮夜話

近藤金廣著

東京名所
常磐橋内
紙幣寮
新建之圖



紙幣寮夜話

近藤 金廣 著



原書房

著 者 略 歴



著 者 近 影

- 明治40年 神奈川県に生れる
 昭和14年 東京外国語学校（現外語大）仏語部卒
 同 16年 高等試験予備試験合格
 同 24年～39年 印刷局研究所庶務課長，業務部官報課長補佐，市ヶ谷工場総務主管，虎ノ門工場総務主管，同工場長事務取扱等歴任
 同 40年 同局修史主管となり「大蔵省印刷局百年史」（全三巻）の執筆，編集に当たった。
 同 48年 退官，現在日本広報協会（社）嘱託

——検印廃止——

©1977

紙幣寮夜話

印刷 昭和五十二年二月一日
 発行 昭和五十二年二月十日

著 者 近 藤 金 廣

発 行 者 成 瀬 恭

発 行 所 原 書 房

東京都新宿区新宿一―二五―二三
 電話 代表〇三三三四〇六八五
 振替口座 東京五一―五―五九四

本文印刷 文 唱 堂
 表装印刷 同美印刷
 製本所 佐拔製本所

はしがき

昭和四十六年に創設百周年を迎えた大蔵省印刷局の歴史を過去に遡ると、大正から明治に戻って二つの分岐点にゆき当たり、そこから更に遡って、明治四年七月の紙幣寮（初め紙幣司）の創設に至る。分岐点の一つは、明治三十一年十一月の、内閣官報局との合流点であり、もう一つは、明治八年九月の太政官正院印書局との合流点である。その本流となっている紙幣寮は、明治四年、廢藩置県直後の七月二十七日に、大蔵省の一局、紙幣司という名で新設され、一カ月後に紙幣寮の名に変わったものである。

これは、その前年にアメリカの財政事情を視察した伊藤博文（当時大蔵少輔）の建議によるもので、そのころ明治政府は、徳川幕府崩壊後の政局を担って、旧幕以来の財政窮乏と幣制混乱に苦しみ、その打開策に腐心しつつも、庶政一新、その近代化への夢と抱負に燃えている時であった。

伊藤の帰朝によって、大蔵機構の整備が進み、通貨制度の改革や国債の発行、国立銀行制度の導入による金融機関の近代化が急速な動きを見せはじめた。

これとともに、流通混乱その極にあった旧紙幣の回収、交換、ドイツ製新紙幣の発行、また国立銀行の創設、育成、指導と、開設早々の紙幣寮に課せられた任務は、緊急にして、かつ複雑多岐にわたった。

これに対し印書局は、明治五年九月、時の左院議員細川潤次郎の建議によって、新政の方途を示す太政官の布達文書や、太政官日誌の印刷頒布を中心とする、いわゆる政府刊行文書の一元的所掌機関の構想から生まれたものであり、また官報局は、明治十六年五月創設の太政官文書局がその前身で、折柄、巷間に高まりつつあった自由民権論と、反政府的言論に対する広報策と、法令公布制度の近代化をねらいとする、官報の発行機関として創設されたものである。

以上のような、使命、目的、性格を異にする三機関が、いわゆる文明開化の進行途上、合併し、合流し、今日に至っているところに、大蔵省印刷局の歴史と性格があり、その風雪百年の歳月は、文字どおり複雑多彩を極め、そのまま近代百年の歴史を映す鏡ともいえる。

私は、永らく「大蔵省印刷局百年史」の執筆、編纂にたずさわり、そこに交錯し明滅していった有名無名の数多くの人々のあることを知った。彼らの中には、遠く海外から招かれ、教師となり、指導者となり、開拓者となって、創業期のあらゆる分野に活躍し貢献した、お雇い外国人という名の一群の人々があり、中には再び故国の土を踏まなかった者もいる。

私は、こうした多くの人々の精進と英智と、血と汗と、時には野望と謀略と、愛と苦悩と憎しみの織りなす人間模様には深い感動を覚え、その色褪せた百年の舞台裏から、できるだけ多くの人と事件を甦えらせ、人間のつくる人間の歴史は、その裏側にこそ真実がある、そんな気持でこの一篇をまとめ、世に贈ることにした。

一九七六年十一月

著者

目次

はしがき

質金ブームとロジャース事件 5

その頃のさむらい達 26

第一話 芳川、福地、青江のこと 26

第二話 得能良介と渋沢栄一 52

人事革命 62

遭難 75

一栄一落 89

画人往来 105

ブラキストン証券事件 112

守警誕生記 129

微禄の果て 142

波乱を呼んだ国立銀行条例 150

十一人のお雇い外国人 166

拾われた留学生	203
大蔵卿と製本工	220
香炉事件と勝海舟	228
運命の人	240
憲法誤記事件始末	252

贋金ブームとロジャース事件

一

時代は大きく移り変わろうとしていた。
そして、あらゆるものが――

新旧交替の激しい流れの中にあつた幕末から紙幣寮創設前後の頃にかけて、各地に頻発する事件、争乱とともに、贋金、贋札造りの横行が人々の生活を脅やかし、新政途上の政府を困惑させた。

当時、国内には旧幕以来の各種硬貨や藩札などが依然として流通し、そのうえ新政府が、創業当初の財政難から心ならずも発行した太政、民部の両札をはじめ、大藏、開拓両兌換証券なども加わり、混乱流通に拍車をかけ、しかも、それらが依然として従来の資材と製造技術の域を出るものではなかつたから、その偽造を一層容易にするという悪条件が重なり、事態は複雑をきわめた。

したがって、この頃の通貨偽造の一大特徴は、単に一人によつて犯されたばかりでなく、転換期に立たされた諸藩もまた大規模に、贋貨、贋札の製造を行ったという驚くべき事実に加え、変革期に乗ずる国際偽造団の跳梁が目立つた。

彼らは上海を根城に製造した贋金を、逆にわが国に持込み、盛んに経済界を混乱させ、一般取引は

もとより、國際信用の上でも、その害毒の及ぶところ計り知れぬものがあつた。

すでに徳川幕府は倒れ、明治新政の世ではあつたが、当時なお封建の余燼くすぶりつづけ、依然各地に昔ながらの藩は存在し、中央集権の実の挙がらぬ時代であつたから、政府はその対策に腐心し、明治二年十月には、類例のない贖金兌換の制を定め、つづいて十一月には、贖金引換用の金札を尾張以東の藩県に交付し、贖金の回収につとめる一方、三年六月十七日には「偽造宝貨律」を定め、翌七月、これを各府藩県に示達し、通貨を偽造、行使する主犯を梟（獄門）、従犯および匠人等を斬に処するなどの嚴刑をもつてのぞんだが、その年八月二十七日には、福岡藩の贖金造りが發覺し、大参事郡成巳、立花増実らの高官が処断されるという事件さえ起こり、この種事件の根深さを露呈し、容易に効果が挙がらぬばかりか、ついには、続発する事犯、罪徒の措置にも窮する有様だった。

明治三年二月、若松県から新政府に提出された伺書によると、

「若松県下方数十里の間一円、贖金贖札製造場にて、其筋に關係せざるもの殆ど稀なり。抑も、斯のごとくなり来たり候根元の儀はしばらく差置き、先ず中頃以来の有様を申すに、大政御一新前の金を徳川吹、御一新後の金を太政官吹、土地にて偽造したる金を御城吹と唱う。唯其の名異なるのみにて、眞贋差別なく融通す。斯れば、奸民争うてか手を出さざるべき、忽ち造意主謀となり、随従与党となりて、専ら之を贗造し、非常の大利を盗む。然れども兵後いまだ何計の月数もこれなく、千緒万端御混雜の折柄にて、上これを罰するに暇あらず、下亦疑を容るる者これなく、斯る勢に付、平民といへども自然煽惑せられて其の功を助け、詐欺せられて其の意を通じ、其の盛なるに至りては、城下市郭にすら製造場あり、其の光景実に今にして見る可きことに御座候。然るに昨年六月嚴禁を布き、九月境関を鎖し、或は捕へ、或は縛し、管内普く犯禁の徒在らしめざる様、烈しく驅立て候に付、……其

後陽に犯す者は之なく候へども、幽僻ゆうへきの地に避て、陰に偽造する者陸續りくぞく之れあり、今に至つて尚絶えず、実に困却の次第に御座候。……然るに旧臘以来、悔悟谷きわまりて罪を自訴する者数百人、他日又幾數百人訴出すべきか、計り知れざる模様に御座候。此の自訴人共には、大抵首犯の者これ無く、如何となれば、首犯は、先づは旧会津藩臣にて、容保父子の用金なり、旧会津藩婦女子の窮迫を救うためなり、会津藩軍用の予備金なり、などと申す名義にて愚民を欺き、平民を威おどし、或は密訴の良民を暗殺する勢にて、贗造場に米味噌を贈らせ、小屋掛の手伝に使い、東西に走らせて、遣い捌かせたる類多ければなり。然れば右の自訴共、……当時の勢を察して論ずれば、其の情状重からずと申すべきか。……一管下おおよそ是の如くにて、此の大海を掃攘そうじやうせぬ限りは、民此の疾苦に圧せられて、寛政を荷なうと雖も楽しむまじく、仁恤じんじつを頂くと雖も悦ぶ間敷く、……在勤の官員一同憂苦に耐えず……」

と訴え、旧藩関係事犯の異常な体質とその経過を伝えているが、この文書を受けた民部省から刑部省に対する同年六月十八日付掛合文書によれば、

「兼て御承知の通り、若松県に於て賈金贗札製造の罪徒非常に多数、既に兵乱後千二百五十人余に及び、昨已五月までの分は、此程赦宥じやうゐうの事に仰出され、其分は先月中赦免、未だ自訴を初め、牢舎、村預け等に相成り居り候分七百八十人余之れ有り、右は追々紕明の上至当の刑典取調べ御省へ差出すべき事に相成居り候へ共、何を申すも多数の罪徒、同県の官員のみにては逸々罪案口書を以て御省へ御問合せ申し候様にては、手数も相掛り時日も費へ……候に付、相成るべくは御省より右裁許片付き候まで、一兩名同県へ出張の上、俱々御尽力下され、急速に相片付き候様いたし度き段、県官より只管に申し出で候。追々炎暑の候に赴き、多勢の牢舎瘟疫あんえき（流行病）伝染、夫れが為め、斃れ候者も少からざる由に付、片時を争ひ早々裁断致させ度し……」

とあって、あまりにも多い罪徒の処断に苦しんだ当時の様子が、生ま生ましく綴られている。

また、「偽造宝貨律」發布後の同年十一月三日の、「斗南藩中貨幣偽造者逮捕方」の布告は、

「斗南藩中貨幣偽造の者少からず、今般御取締り相成り候えども、偽造の徒多人數脱走に及び候に付ては、此後何れの地へ潜匿、再び偽造相企て候も計りがたく、国の大禁を犯し不届に付、向後贋金贋札等を企て候者を見聞に及ぶの事実相違なきにおいては、速に召捕り、かねて御布令の偽造宝貨律に照準し、処置致すべし。万一手向い候者は打取り候ても苦しからず……」

と、ついに犯行者に対する厳しい態度と事件処理の迅速化に決断を下している。

二

ここでは専ら贋札事件が中心となるが、明治三年六月、政府は贋札取締りについて各府藩県に密諭を下し、

「紙幣は政府將に漸次に交換して之を回収せんとす。然るに近來贋模紙幣の多く各地に流布するありと聞く、是実に国家の大患、人民の巨害にして、決して輕視すべきにあらず。故に今や嚴密なる警察法を設け、以て其犯者を探偵す。因て苟も管内及近傍地方に犯者の在るありと聞かば、事實を推究して速に民部省に開申し、且つ管内に流布する贋模紙幣を審査し、若し檢出するあらば、乃ち其出処を推究し、出所の明白ならざるものは責收して断裁に付し、其事由を民部省に開申せよ。然りと雖若し公然に告達せば、人民に疑惑を生ぜしめ、或は融通を阻隔するに至り、其患害却て小少に非ずと、宜く此旨趣を領會して之を処理すべし。若し管轄内に犯者の在るあって、他方より發覺せば、管轄庁の主宰を責むるに曠職の罪を以てせん。且つ政府或は特に官吏を差遣して提督せしむるあらん。各管轄

庁篤く官旨を体認し以て厳密に処分すべし。」

と、暗に各藩に牽制、威圧を加え、つづいて贋模紙幣巡察順序を定め、また贋札改所を三府および横浜、神戸の各地に開設した。後には、藩県等にも贋札改所を設け、その根絶を期したので、偽造事犯は続々発覚し、逮捕、処刑されるものが相次いだ。

国際事犯では、官員を上海に派遣し、清国その他外国公館側の協力をもとめ、犯人を探索処罰させ、あるいは贋版を没収するなどのこともしばしばだった。

しかし、いかに取締りを厳しくしても、もともと旧藩以来の各種紙幣の混乱流通と、製造技術に欠陥がある以上、偽造事犯の根絶は不可能と知った政府は、折柄わが国に在勤していた北ドイツ連邦公使フォン・ブランド(Max August Scipio Von Brandt)のすすめに従い、防贋技術の進んだドイツのビー・ドンドルフ・ナウマン会社に、新紙幣の製造を依頼し、これにより旧紙幣の回収整理を行なうことを思い立った。

これが、いわゆるゲルマン紙幣であって、明治四年七月の紙幣寮創設と関連し、紙幣近代化の幕開けを飾る発端となった。

三

さて、このような開明途上の混乱時代を背景とした、明治三年八月の或る日、横浜居留地一三四番地に雑貨商を営む、米国籍のフランス人ロジャースの店に、一人の年若い男がやってきた。

小田原宿宮前町の山岸鉄次郎という者で、ロジャースとは、すでに顔なじみの間柄、最近では父の長吉の代理でよくやってくる。

「鉄次郎さん、あなた、いい時に来てくれましたね。」

と、ロジャースは、いつものように愛想がいい。

「私、今日大変ひまです。商売あとにして、まあ、こっちへ上がんなさい。いいもの御馳走しましょう。」

鉄次郎は、誘われるままに、奥まった一室に上がり込んだ。見慣れぬ調度品や部屋構えに眼をかがやかして、

「これ、私の国から来た上等の葡萄酒です。おいしいですよ。」

と、ロジャースは、赤い液体の入ったギヤマンのびんを取り出し、鉄次郎にすすめ、自分も甘そうに飲んでみせた。

鉄次郎が、異国の酒に陶然と頬を染めた頃、ロジャースが身を乗り出した。

「よかったら、これ皆あなたに上げます。ところで鉄次郎さん。あなた彫刻のうまい人知りませんか。二、三人欲しいのです。ぜひ紹介して下さい。」

葡萄酒をもらって、すっかり気を良くした鉄次郎は、彫刻にもいろいろあるが、一体どういうものを彫るのかと反問した。すると、ロジャースは急に声を落とし、

「鉄次郎さん、私あなたを信用して、本当のこと言います。これ私とあなたの二人だけの秘密です。」

と、ロジャースは、懷中から一枚の紙片を取り出してテーブルの上に置いた。一両の太政官札だった。鉄次郎が不審そうに、ロジャースの方に眼を向けると、

「私、これと同じ物、沢山造りたいのです。今の日本の政府、まだまだ信用できません。政府の造るお札、みな借金証文みたいなものです。本当のお金無いからです。だから政府が変われば、皆通用し

なくります。どこの藩でも、みな、ないしよでこのお札造っています。そうしなければ不安だからです。私達もいまのうちにこのお札沢山造って、本当のお金と取換えておきましょう。だから、これと同じ物造れる職人必要なのです。」

もともと単純な頭の鉄次郎のことだから、いつの間にかロジャースのたくみな口車に乗せられてしまった。「よし、やってやろう」という気になった。密約は簡単に出来上がった。

四

奸商ロジャースの意を受けた鉄次郎は、にわかに出歩くことが多くなったが、それからふた月ほど経った或る日、商用にかこつけて、一人で東京に出かけていった。

この頃はもう、横浜、東京間に乗合馬車も通うという時代だったから、若い鉄次郎にとって、東京はもう眼と鼻の先の感があつた。

この日は、同業の大木文七を訪ねるのが目的だった。日頃から往来のある、遊び仲間に近い間柄だった。

話はすでにまとまっていたので、彼の口ききで、同じ町内に住む彫刻師清水龍蔵と、同人方同居人増田佐太郎の両名が紹介された。

「実は、取引先の横浜居留地の外国人から、彫物師が欲しいと頼まれたのだが、何分細かい横文字を彫る仕事なので、腕の良い職人でなければ困るという話だ。お前さん方二人に引き受けてもらえれば、願ってもないことだが。」

と言葉たくみに持ちかけ、詳しい話は直接本人から聞くようにと、二人を待ちかねていたロジャー

スの許へ連れていった。

二人をロジャースに引き合わせた鉄次郎は、なにか大事業をもくろむ企業家のような満ち足りた氣持で、そこから何処かへ姿を消した。ロジャースは、龍藏と佐太郎を奥まった一室に招じ入れ、ここで贋札製造の一件を持出し、二人で偽版の彫刻を引き受けてくれるよう依頼した。

「うまく彫れたら、お礼充分します。あなた方何も知らないでいいのです。決して迷惑かかりません。」

びっくりした二人は、

「それでは、話が違ふ。」

と拒絶し、あわてて席を立とうとした。

するとロジャースは、ガラリと態度を変え、いきなり立上ると、二人をその場に蹴たおした。

「ここは居留地です。日本の官憲力ありません。あなた方、私の言うとおりにする、身のためですね。でないと、そのままでは帰れないでしょう。」

と脅迫した。

二人は懸命に逃げ出そうとしたが、どの扉にも鍵がかかっていた。遂にロジャースの威嚇に屈した二人は、ロジャースの命ずるままに数日ここに滞在して、一両の偽造札二十枚ほどを製造した。

一見して本物そっくりに見える贋札を手にしたロジャースは、ニヤリと満足気な笑いを浮かべ、

「では、あなた方に試験してもらいましょうか。」

と、そのうちの数枚を彼らに手渡した。

日暮れを待つて、せき立てられるように表へ出た鉄次郎、龍藏、佐太郎の三名が、付近の居酒屋で

一杯やり、その代金を刷り上げたばかりの一両札で支払った。

しかし、元来が悪人でない彼らのことであるから、賈札と知って差し出す様子に、何かしらギョギョの現われぬ筈はなかった。

彼らの様子と、何気なく出された紙幣の真新しさと、いつもと違う手ざわりに、早くも「不審」を抱いたのは、さすがに、金銭の出し入れや人扱いに慣れたこの家の亭主の感だった。奸智にたけたロジャースも、このへんの配慮に甘さがあつたのか、あるいは、大仕事をもくろむ前の小手調べだったかも知れない。

つり銭はいらぬと帰りかける三人を、「余分に頂くわけには参りません」と待たせておいて、裏口からこっそり、その筋へ人を走らせた。

すねに傷もつ思いで、何となく不安になった三人が、早々にその場を立ち去ろうとしていたところへ、ドヤドヤと押し込んできた捕手の一隊、三人は有無を言わず召捕られてしまった。道具に使われた二人の彫刻師こそ、いい面の皮だった。

取調べの結果、彫刻師二名の紹介者大木文七は、ロジャースから、謝礼として十八両を三回にわけて受け取っていたこともわかり、主犯ロジャースの罪状がすべて明るみに出たので、神奈川県当局は、とりあえず外務省を通じて、これを米國領事に移牒の手続をとった。

これを受けた横浜在勤のライオン(Samuel S. Lyon)領事が、時を移さずロジャースを召喚して、日本人側犯人と対決させたところ、悪びれもせず一切の罪状を認めた。しかし、たまたま日本人側犯人が、拷問による病気のため出廷不能となつたので、その回復をまって取調べを再開する運びとなつた。

ところが、ここに思いがけぬ事件が起こった。ライオン領事の急死である。身柄不拘束のままだったロジャースは、この機に乗じて秘かに香港へ脱出してしまったのである。

後任領事シェパード (Charles O. Shephard) が、日本側の督促で、ロジャースを再召喚しようとして、はじめてこの事実がわかった。これに対し、新領事は、「彼の帰港を待つ以外に方法はない。当方には外地へ脱出した者に対する逮捕権がない。」

と、この事件の処理に消極的な態度をとった。

こうなると、もはや下級官庁では埒があかなかった。事件は外務卿沢宣嘉と米公使イー・デ・ロング (Charles E. De Long) との交渉の場に移された。明治四年六月二日のことだった。

五

さて、一方これと同じ頃、今度は神戸で一両の贋札行使事件が起こった。容疑者として捕縛されたドイツ人雇傭の播田勘兵衛、米人カセイらを取調べたところ、製造の贋一両札一千枚を超え、連累者の中には、イタリア人や支那人も含まれるという、大規模な事件であることが判明した。しかもその背後に、ローグルと名乗る主犯のフランス人のいることがわかり、捜査当局に衝撃を与えた。ローグルは、ロッチェルと変名して目下上海に潜伏中であるとの情報さえ入ったが、ローグルは先に日本を脱出したロジャースと同一人であることが、ほぼ推定されたからである。

彼らは、上海で一両札を偽造し、これを横浜に密輸して、使用の途上発覚したものである。

この事件の連累者のうち、支那人三名は、一両の贋札五百枚を所持し、横浜表へ逃亡中だったの
で、地元の兵庫県当局は、とりあえず逮捕係一名を横浜に派遣して、神奈川県当局に協力をもとめる